
ゴーストスーパー横島 極楽大作戦R!!

スイショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストスイーパー横島 極楽大作戦R!!

【Nコード】

N9679Y

【作者名】

スイシヨウ

【あらすじ】

美神令子嬢——美神除霊事務所所長。この業界ではトップクラスの実力の持ち主である。横島忠夫——美神除霊事務所に所属するアルバイト所員。荷物持ち兼丁稚兼高校生。この業界では、いや業界を超えてトップクラスの——女好きである。そんな彼の物語。

この小説は原作とは微妙なズレを生じさせたいわゆる再構成モノです。シリアス度は低めになっております。

arcadia様でも掲載中です。

漢（オトコ）の決意

命とプライド、どちらを取るか。

命と金、どちらを取るか。

ためらう事なく即答しよう。

命の方が大事に決まっていると。

しかし、だがしかし！

命と女。ならばどうだ？

ただの女ではない。綺麗なねーちゃんだ。ムチムチプリンの極上なねーちゃんだ。

しかも！ しかも相手は尽くすタイプだと言っている！ 出血大サービスだと言っているッ！！

この世に生まれ落ちて17年。ようやく訪れた我が世の春の前に、この熱く滾る情熱を抑えることなど出来ようか！？

答えは否。断じて否！！

「と、ゆーことで目の前に開かれた青春の門への誘惑に勝てなかったんやーっ！」

「何がとゆーことで、だ！ 毎度ながらいいように操られよってかにコイツは。」

しかも、今回は雇い主を生贄にしようなんてね。いい根性してるじゃないの横島クン？」

「かにんやーっ！ しかたがなかったんやーっ！！ だってだって、あの女の幽霊が美神さんにとり憑いたら二人で幸せになれるってーっ！ なるうってーっ！！！」

「ええいッ！ 泣きつくな抱きつくな離れんかこのクソガキー！」

！」

「ああっ、お姉さまの良い匂い！ 美神さんってあったかいなー！
やわらかいなーっ！！」

「ぶち殺すぞこのセクハラ小僧が！！」

私の名前は横島忠夫。平凡で善良な17歳の青少年。前途有望な若者である。

異国へと旅立った両親の手を離れ一人日本に残った私は、一日も早く自立した人間になれるように学業の合間をぬってはアルバイトに精を出す日々を送っていた。

美神除霊事務所。それが私の職場である。

平時には平凡な学生として日々を過ごし、時が来れば人に仇名す悪鬼悪霊を打ち払う正義のゴーストスイーパー。

それが私のもう一つの顔だ。

折からのバブル景気、それに伴う地価高騰によって地縛霊の除霊は超ボロい仕事となっていた。

一般人が住む場所にすら不自由し始めたこの国に、もはや幽霊であろうとも住まわせておく余裕はない。

そして、地縛霊に対する除霊への報酬が跳ね上がった影響か、除霊という行為自体へ求められる報酬の相場も比例するように上昇する。

多くの霊能者、それに関係する者たちが莫大な利潤を生み出すソレへと群がり、除霊は一大ビジネスとなって瞬く間に世間へと広まっていた。

無論、おいしい話には裏がある。

富と言うリターンを得るために、悪霊相手に差し出すチップは己の命である。

これを高いと見るか安いと見るかは人それぞれであろうが、私に言わせればそんな物に命をかける彼らの気がしれない。

そんな強欲者たちの中でも一際異彩を放つのが私の雇い主であり目の前にいる人物、美神令子嬢だ。

燃えるような赤い髪と誰が見ても目を引いてしまう美しい容姿、抜群のプロポーションを惜しげもなく晒すボディコンに身を包んだ彼女は20歳という若さでありながら今や押しも押されぬ業界トップクラスの人物である。

勢いのままに彼女に抱きついてしまったが、私はこの程度で満足するような軟弱な男ではない。

いつの日か堂々とこの手で彼女とくんずほぐれ――

「アンタねえ、本人を前にしてずいぶんと好き勝手言ってくれるわね」

「ああっ!?! 心の声が口に出てた――っ!」

「それに誰が正義のゴーストスイーパーか! アンタはただの丁稚でしょーが!?!」

「ちょ、荷物持ちから丁稚に格下げっすか――っ!?!」

「婦女暴行罪でブタ箱に放り込まれただけでもありがたいと思わんか――!?!」

「ブーツが!?! いつものハイヒールよりはましだけどブーツのヒールでもぐりぐりはやめて! 愛が、愛が痛い――っ!」

『えーかげんにせんか貴様等ーっ！！』

俺が命を掛けて女体の神秘に挑もうとしていたところに野太いおっさんの怒声が響く。

開けてはいけない新しい世界への扉を開きかけていた俺にとっては助けにも似ていたが、美神さんが脚を振り上げるⅡスカートの中の絶対領域に近付けるという究極の公式が成り立っていただけに恨めしさが募る。

どこのどいつだと声の出所を探れば、俺といっしょに幸せになろうと言った女の幽霊が居た場所だ。

そこにあの女の姿はなく、別の幽霊の姿があった。

いや、よく見れば見覚えがあるような。

「ハッ、やっぱりアンタがそうだったのね。化けの皮を剥がして本性を見せたわね鬼塚畜三郎！」

『ドやかましーわ！ 黙っておったらイチャイチャしおって！！イヤミか！？』

殺されるまでの32年間、女っ気なんぞ全くなかったワシに対してのあてつけかーっ！！』

「なっ！？ 幸薄そうな出前のねーちゃんがあのおっさんになったーっ！？」

鬼塚畜三郎。

今回美神さんが受けた除霊物件。そこで起きていた霊障の元凶でありこの建物の主であった男の悪霊だ。

残忍非道で冷酷無比。10代で一大勢力を築き上げた犯罪組織のボス。

その最期は部下に裏切られて殺された、というものらしいが生前の経歴を見れば同情の余地はない。そんな男だ。

しかも、死後悪霊になってまで人様に迷惑を掛けているようないつこい奴だ。

そんな奴が相手なのだから、俺はてっきり問答無用でシバキ倒すのかなと思っていたら美神さんの考えは違ったらしい。

曰く相手が相手だけに噂や報告書なんてあてにならない。本人の言い分も聞いてやりましょう、と。

美神さんも後ろ暗い事ありますからねーと言ったらシバかれた。

で、交霊術だか降霊術だか分からんがとにかくそーゆー術を使って本人を呼び出したわけだ。

結果は真っ黒。

報告書や噂に嘘偽りはなし。本物の悪党だった。

何やら喚き叫びながら突っかかってきた鬼塚の霊を平然と踏みつけていた美神さんはスゴイと思う。

その場は逃げられてしまったが相手は地縛霊。この建物から外へ出る事はまずありえない。

長期戦になると見越した美神さんが相手の出方を見る為に俺を餌にした時には、正直はらわたが煮えくり返る思いであったが、お願いをされたあの時の、お互いの顔を間近に寄せ合ったあの瞬間のトキメキの前には許してやらん事もなくはない。

さりげなく胸が当たっていた事も大きい。誘っているのか？俺を誘っているのか？

ゴチになりますと抱きしめら腹に強烈な膝蹴りを食らった。しかし悔いはない。

そんなこんなで色々あって冒頭に至るわけだが、改めて思い出したら腹が立ってきた。

「俺の純情を弄んだんだなコンチクショーーーーッ！！　ヨコシマパーンチ！！」

狙いは当然目の前の鬼塚だ。

美神さんに踏みつけられていた事を思い出せば、相手は柄が悪いだけで大した事はないはずだ。

そんなはずがあるわけがないのに。

相手は霊だ。人に害をなす悪霊だ。

生身の人間、それも一介の高校生、荷物持ち程度にどうこう出来るような相手のはずがない。

美神さんはプロなのだ。彼女は中でも特別なのだ。自分など彼女の周りにいる有象無象の一人にしか過ぎないのに。

強いのは美神さん、弱いのは美神さん。目の前の悪霊が恐れたのも美神さんだ。俺じゃない。

悪霊は横島忠夫の存在など歯牙にも掛けてはいない。

俺は何を勘違いしていたのか。

「ゴフッ！？」

俺のパンチは鬼塚の身体をすり抜けて空を切る。それなのに、勢いのままに突き進む俺の身体は“鬼塚の霊体にぶつかって”弾き飛ばされていた。

冗談じゃない。こっちの攻撃はすり抜けるのに相手の攻撃は当たるってどんな反則だ。

「横島クン!？」

美神さんが俺の名前を叫んでいた。

ド素人の俺が、臆病な俺が見せたアホな行動は彼女にとって予想など出来るはずがない。

申し訳ない気持ちになりながら、怒っているだろうなと美神さんを見た。

いつも高飛車で妙な自信に満ち溢れて、自分や金銭の事意外は屁とも思っていないであろう高慢ちきな女王様が、泣きそうになっていた。それは俺が見た美神さんの初めての表情だ。

見てはいけなかった、させてはいけなかった表情だ。

美神さんが持っていた霊体ボーガンを投げ捨てて飛び出した。

鬼塚の悪霊が俺を喰い殺そうと迫ってくる。

美神さんがスカートの陰に隠していたホルダーから神通棍を取り出して振りかぶる。

鬼塚が大口を開けて俺に覆い被さろうとしている。

間に合わないな、と冷静に状況を把握している俺がいた。

死に際の集中力だとか、走馬灯ってものは眉唾物だと思っていたがどうやら本当にあるものらしい。

俺の脳裏にこれまでの17年間のスクリーンに映された映像のよう流れしていく。

色鮮やかな場面もあればモノクロの場面もある。ノイズにまみれ

て何が何やら分からない場面もだ。

登場人物も多種多様。美神さんや親父やお袋、学校の友人や疎遠になった幼馴染、商店街のおっさんやエロビデオの女優さんもいる。けしからんくい込みのレオタード、いやビキニか？

そんな全くもってけしからん格好をした見知らぬ美女の姿もあれば、清楚な巫女さんやら褐色の肌の美女、十年後ぐらいに会ったかった少女や十年前に出会った美人さんの姿もあった。

犬のような尻尾を生やした少女、小生意気そうな少女、角を生やした女性に猿とかマザコンとかロン毛とか……

ちょっと待て。

いやいや、ちょっと待て俺の走馬灯。

明らかに“見た事もない、名前すら知らない美女たち”がいるのはどういう事だ？ 男もいたような気がするがそんな事はどうでもいい。

何だこれは？

俺はこんなにも美女に飢えているとゆーのに！

彼女ナシ17年の切ない生涯を終えようとしているのに！！

俺の走馬灯らしきモノは俺の見知らぬ美女たちに満ちているではないかっ！？

あり得ない！

理不尽だ！！

俺の走馬灯モドキっぽいモノの分際で、俺の知らない美女を侍らすとはいったいどういう見かっ！！

赦すまじ、俺の走馬灯みたいな何か！！

俺はありったけの怒りと憎しみと嫉妬と煩惱と色々なモノを混めて込めて――

「そのねーちゃんたちは全員俺のモンじゃ――ッ!!」

『ギィヤアアアア――!』

我が生涯に一片の悔い無しと、大往生を果たした世紀末覇者の如く。

拳を天に突き出して立ち上がっていた。

ワタ飴みたいななにかをぶっ飛ばしたような気がするが、今はそんなことよりも!

「何だあのけしからん乳尻太ももたちは!! ハッ!? そうか、あれは俺の妄想の中の住人!

つまり著作権者は俺! ナニをどーしよーが俺の自由!! 俺だけの――」

“ ナニを―― ”

「俺だけの桃源郷――!?!」

「トチ狂つとるかキサマは――っ!!」

「うぎゃ――っ!?!」

修羅の如き美神さんのシバキを受けてぶっ飛ばされる俺。

あまりの衝撃の為か、その瞬間に俺の脳内の桃源郷の住人たちが霞がかって消えていく。

「ア、アカン！ そんなアカン！！ まだ何にもしていないとゆーのに！！」

必死だった。

「幻でもせめて一掴みーっ！」

次の給料日まで一週間の時点で所持金が三桁を切った時よりも必死だった。

失われていく桃源郷のねーちゃんたちを掴み取ろうと必死になって手を伸した。

その手が――届いた。

美神さんの――胸に。

翌日、俺は白井総合病院のベッドの上にいた。

横では簡素な椅子に腰掛けた美神さんがなにやら書類の修正作業をしている。

あの後でいったい何が起こったのか。俺にはきれいさっぱり記憶がない。

気がついた時にはベッドの上だった。

重症だったが後悔はしていない。悔いはない。

あの時確かに手にした乳の感触はいまだこの手の中にある。

この感触を覚えている限り俺はまだまだ進めるはずだ。

バレたらきつと殺されるので、この事は胸の奥に永久に封印しておこう。

そんな事をぼうっと考えていたら、美神さんが澄みきった笑顔で修正の終わった書類を俺に突き出していた。

雇用契約書と書いてある。

「横島クン？ “昨日から” 時給250円ね」

「……給料なんてどうでもいいです。一生ついていきます
おねーさま」

そうだ、悲しくなんてない。俺はやり遂げたのだから。
決してこめかみに井桁を貼り付けた美神さんの笑顔に、溢れ出る
黒いオーラに屈したわけではない。

命とプライド、どちらを取るか。

命と金、どちらを取るか。

ためらう事なく即答しよう。

命の方が大事に決まっていると。

しかし、だがしかし！

命と女。ならばどうだ？

ただの女ではない。綺麗なねーちゃんだ。ムチムチプリンの極上
なねーちゃんだ。

そして俺の勘は告げている！

このねーちゃんについて行けば、俺はきっとあの桃源郷に辿り着く事が出来ると！！

桃源郷が何なのか、自分自身さっぱり分からない！

だが、俺のことだから美人でエロくて可愛くて控えめで、それでも時々ふとしたことで――

とにかく！

俺の勘が告げている。このねーちゃんから、美神さんから離れるなど！

当たり前だ！！

この横島忠夫、美人の為なら命など惜しみはせんっ！

でも、時給はもうちょっとなんとかありません？

駄目っスか？

薄い人

ゴーストスイーパー

GSの仕事、特にこの美神除霊事務所で行う仕事の大半は予約制だ。

依頼を受ける際にはまず相手の事を調べ上げ、次に依頼内容を注意深く確認し不備や偽り、誤情報が無いかを入念にチェックする。そうして依頼主の信頼性と依頼内容をクリーンにしてから仕事の準備に取り掛かるのだ。

物件への除霊であれば、その建物の成り立ちからそこに関わったであろう人々の事まで調べ上げ。

悪霊を掃う依頼であれば、例え気に食わない同業者であろうとも上手く利用して相手の情報を得る。

情報を得た後には必要となる道具を揃え、自身のコンディションを万全に持って行く。

美神さんが仕事を行うという事は、つまりは絶対の勝算が有つての事。依頼を完遂できると確信するからこそ動くのだ。

自分の能力を過信せず、しかし過少せず。

綿密な計画をうち立てる繊細さと、時にはその計画すら覆して行動する大胆さ。

そういった様々な要素が若くして超一流と呼ばれる美神令子を形作っているのだ。

下手に失敗でもしてこれまで培ってきた評判や、莫大な違約金を払いたくない、と言うのが9割ぐらいは有ると思う。特に金。

そう、美神さんは金に厳しい。厳しいというよりもがめつい。そして微妙にセコい。

使う時にはパーっと使い、特に仕事がない時でも事務所に入り浸っている俺に昼飯を奢ってくれたり晩飯を奢ってくれたりするのに

仕事の報酬となるとホントに厳しくなる。

実際、これまでも依頼人と諸経費や報酬の件でトラブルになった事は多々あった。

その全てに美神さんは守銭奴と言う言葉が温く思える様な悪辣な手を用いてでも勝利をもぎ取っていた。

背中をすすけた依頼人や、物凄い勢いで頭髪を失った依頼人の姿を俺は忘れる事はないだろう。多分。

アレか？ 提示された報酬の金額が自分自身の価値に繋がっていても思っているのか？

だとすればそれは――悲しい事だ。美神さんの価値はそんなモノでは計れないというのに。

その乳房フトモモさえあればこの横島忠夫、例え火の中水の中。

行けと言われれば宇宙にすら行ってやるとゆーのに！

そう、美神さんの乳房フトモモは俺の――

「俺のモンじゃーっ！っ！！」

「わたしの乳房フトモモはわたしのだーっ！っ！！」

「ああっ！？ またしても口に出てた！？」

美神さんからの渾身のアックスボンバーを喰らってぶっ飛ばされる俺。

毎度毎度理不尽な虐待を受けているはずなのに、肌と肌が触れあえた事でどこか満足している自分に気が付き愕然とした。

「ち、違う！ 嬉しくなんてないっ！！ こんな事で満足したりなんてするもんかっ！ 俺は、俺はっ！っ！？」

「アンタはさっきから何をワケの分んないコトを言ってるの？」

ジト目で俺を睨む美神さん。

あ、なんだかちよつと……

「んゝ、やっぱり今日はこの辺にしておきましょうか」

「あ、それじゃあ今日は……もう予約も無いですね。てことは終了あがりっスか？」

さて、美神除霊事務所が行う仕事の大半は予約制ではあるが、必ずしもそれが必須であるというわけではない。

同業者への臨時のヘルプや緊急を要する依頼などが舞い込む事も多い。

美神さん的にはそういう臨時の仕事の方が色々美味しく好きなんだそーだ。

“足下見てふっかけられるからねゝ。そーゆー輩って私の評判を知っていて、それでも来ているのよ？ もー鴨がネギ背負って来たって感じ！！”

らしい。

ひでえ。

でも、こーゆー時の晩飯は豪華になる事が多いから俺としても歓迎だったりする。

時給250円。この現実を俺は心のどこかでなめていたかも知れん。今更ながらに。

「むゝ、そうね。私の靈感にもこう、ピピッと来るものがないし」

眉間を押さえながら美神さんが呟く。

美神さんのこの靈感ってやつは意外と馬鹿に出来ない。

こと金銭に関する事に対しては。

「最近先生にも顔を見せてないし、丁度良いかな」

身体が半分以上埋まりそうな豪華な椅子に座っていた美神さんが立ち上がる。

ちなみに机はマホガニーとかいう超高級ブランド品らしい。

机なんてコ○ヨの学習机とか学校の机みたいなもので十分じゃないかとは思うのだが、こーゆー商売をしている以上、ある程度の見得やハツタリは必要なんだと以前美神さんがぼやいていたのを思い出した。

事務所内には俺には何が高級なんだかさっぱり分らない壺やら絵やらがたくさんあるしな。

都内のテナントビルの5階フロアを全て借りきって事務所にしているのもそーゆー事なのだろうか。

金持ちの考える事はよー分らん。

おやつとして置かれていた袋入りビスケットをいつものようにジージャンのポケットに入れながらそんな事を考えていた。
そんな時だった。

「横島クン今日この後暇？」

何だ？

今、何と言った？

この女は今、何と言った？

横島クン——俺の名前だ。君ではなくクンである所がポイントだ。今日——トゥゲザーだ。確かそうだはずだ。トゥモロウだったよ。うな気もする。

暇——暇だ。時計を見ればまだ夕方の4時。確認したのはもちろん事務所の時計でだ。腕時計なんて高級品を俺が持っているはずがない。

正直、こんな時間からボロアパートに帰ったところで時間を持て余してしまうだけだ。

唯一の楽しみであるAV観賞をしようにも昨日返却したばかり。新たに借りる金も延滞する金もないのだ。

18歳未満？ ソコはソレだ。

待て、落ち着け横島忠夫。

さて、冷静に考えてみよう。

よこしまくんきょうこのあとひま？

横島クン今日この後暇なら付き合わない？

横島クン今日この後暇なら私と一緒に夜景の見える洒落たレストランで食事でもしない？

横島クン私貴方の事が初めて見た時から愛していたの——抱いて

!!

横島クン令子子供は男の子と女の子の二人欲しいな。

「つまり今日から令子は横島令子ーっ!!」

「脳ミソ腐ってんのかこのクソガキーッ!!」

世紀の大怪盗三世を超えたかもしれん俺の全身全霊を込めた愛情表現は美神さんには刺激が強過ぎたらしい。

横島専用と書かれた神通ハリセンなる凶器の一撃によって俺は意識を失った。

ただし、意識を失う瞬間、美神さんの呟いた言葉はしっかりと心に刻み込んでいた。

「なかなかイイ感じねコレ。厄珍もたまには良い仕事するじゃない」

厄珍？

男か？

男なのか？

そーだ、男に決まっている！ きつと2. 5頭身ぐらいの胡散臭いエセ中国人っぽい奴に違いない！

厄珍なんて名前の美少女が存在するはずがないのだ。

いや、男だと？ イカン、それはイカン！

美神さんにどこの馬の骨ともしれん奴が近付くなど許せるはずがない!!!

俺がああ乳尻フトモモに触れるためにどれだけのモノを掛けて挑んでいると思っっているのだ！

誰にも渡さんぞ!？ 美神さんは俺のモンじゃー!!

「ハイ到着。ここよ」

「ここって……教会じゃないっすか。なんつーか、美神さんとは対極の場所のよーな」

美神さんの運転する車の助手席で目を覚ました俺が連れて来られたのは、御世辞にも立派とはい辛い、ぶっちゃけボロっちな教会だった。

建物は大きいし、敷地内には庭もある。

都内でこれだけの物件なんて結構な金になりそうだが。なりそうなんだろうが。

素人の俺にも分る。ここに金運はないと。

幸が薄そうと言うか、なんだか色々と薄くなりそうな。そんな微妙な雰囲気を感じるのだ。

それに、いつもの俺であれば二人っきりで教会なんてシチュエーションに燃え上がるはずなのだが、どういうわけかこれっぽっちもそんな気にならない。なれない。

「アンタ私をどーゆー目で見ているのかしら？ まあ、確かに色々薄くはなっているみたいだけどね」

「はあ。で、ここに何の用があるんです？ 道具は持ってきてないみたいですけど除霊っすか？ なんか憑いてそうですもんね、ここ」

「そんなワケないでしょ。ここの責任者は超の付く一流のGSなの

よ？ まあ、私も実は貧乏神に憑かれているんじゃないのかって疑った事もあるけど」

そう言って美神さんは敷地内を慣れた様子でずんずん進んで行く。俺は置いて行かれまいとその尻を追い掛けた。うむ、今日も実に良い尻だ。

「先生ー？ 唐巢先生ー？ 生きてますー？」

「ドアを開いて開口一番の挨拶がそれっていいんスカね？」

「甘いわね。ちょーつと目を離れたスキに餓死しちゃうような人よ？」

「GSって儲かるんですよね？」

「先生は超の付く一流だけど超の付く善人でもあるのよ」

なんのこっちゃ？

ん？ 先生？

「先生って、美神さんミッション系の学校に通っていたんですか？」

教会内はボロっちい外観とは裏腹に、想像していたよりも教会だった。

ベンチみたいな椅子が並んでいてその先には壇があって十字架があってステンドグラスがあって。

「違う違う、GSの方よ。資格を取るには研修が必要で、唐巢神父はその時の私の研修先の先生だったの」

ここで研修していたのよ。そう言いながらも家捜しする勢いで先生とやらを探す美神さん。

いや、美神さん？ さすがに椅子の下に人はいないと思うんすけど。

それにしても高校生ぐらいの時の美神さんの先生か。

高校生の美神さん。

女子高生の美神さん。

「ぐびびっ」

イカン。想像したらよだれが。

「アンタねえ、いつかホントに捕まるわよ？」

「おや美神君、久しぶりだねえ」

「お久しぶりです先生。先生もお変わり……元氣そうで安心しました」

「美神君、人の頭を見てから言い直すのは止めてくれないかね？」

「すみません先生。それじゃあ——また薄くなりましたね……」

「言い直すのかね!? そこまでハッキリ言われるとさすがの私も心に来るモノがあるんだよ!？」

勝手知ったる我が家と言うか。

手慣れた様子で戸棚からカップやらなんやらを取り出すと、勝手にお茶の用意をし始めた美神さんにそれじゃあ俺もと付き合いながら二人でくつろぐこと20分程。

眼鏡をかけた男性がやって来た。

人の良さそうな、柔和な雰囲気を全身から醸し出しているいかにも神父、いかにも善人そうな男性だ。

見たところ40代ぐらいだろうか。
なるほど、確かに薄い。

「まったく、久しぶりに顔を見せたかと思えば。変わらないねえ美神君は」

ずれ落ちた眼鏡を直しながら、やれやれと呟く神父。

しかし、その表情はなんと言うか我が儘を言う娘を困った感じで見守る父親のようにも見え。

美人のねーちゃんに、美神さんに近づく男は基本的に全て俺の敵だが、この神父に関しては認めてやってもいいかなど。何となく俺はそう思っていた。

「君の活躍は聞こえているよ。相変わらず——お金に執着しているようで。変わらないねえ美神君は」

一転してどんよりとした雰囲気呟く神父。その姿を見た俺は“ああ、この人も美神さんに苦勞させられたんだろうなあ”というのが非常によく理解出来た。

そうか。俺が神父に対して敵意を抱かなかったのはこのシンパシ
ーのせいかな。

腕を組みながらうんうんと頷いていた俺に気が付いたのだろう。

「ああ、見苦しい所を見せてしまったね。私は唐巢。この教会で――
破門された身ではあるが神父をやっている者だ。初めまして横島
君」

「あ、はい。どうも、初めまして横島忠夫です。えーっと神父は俺
の事を？」

「ああ、美神君から聞いているよ。面白い助手を雇ったとね」

「はあ」

ニコニコと笑っている神父の様子から、悪くは言われていないよ
うだとは思うのだが。

あゝ、なんか気になる。気にし出したらひっじょーに気になる。
別に男にどう思われようがかまわんが、美神さんが、あの美神さ
んが俺の事をどう話していたのかが気になって仕方がない！！

『先生、実は私バイトの子を雇ったんですよ』

『横島忠夫君。彼って年下なんだけどスッゴクカッコ良くて頼りに
なってる』

『だからお世話になった先生のところで結婚式を挙げようと思った

んです』

「つまりここから始まる俺と令子のバージンロードーッ!!」

「自重と言う言葉を知らんのかキサマーッ!!」

美神さんのハイキックを喰らってぶっ飛ばされる俺。

「ハ、ハハハ……。うん、話に聞いていた通りだねえ……」

あの、神父？

笑ってないで助けてもらえないでしょーか？

あなたの教え子さんに現在進行形で殺されそうなんですが。

ところで美神さん？

わざわざ俺なんかを連れて来て、一体ここに何しに来たんでしょーか？

ああ、今日は“白”なんスね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9679y/>

ゴーストスーパー横島 極楽大作戦R!!

2011年11月29日11時46分発行